

「美術力」をはぐくむために

杉本昌裕

1 はじめに

「美術による教育及び文化普及」が跡見学園女子大学での15年間の研究テーマである。「美術の学力」をどのように捉えるか、知識とともに大切な「技の継承」「技能」を学生にどのように伝えるかを、筆者は研究・実践してきた。「新しい学力観」「確かな学力」「PISA型学力」などが教育界で論議される中で、美術を学ぶと「何ができるようになるのか」を明確にする必要がある。

学力重視の現在の学校教育において、小学校の図画工作（以下「図工」と略す）と中学校及び高等学校の美術は、授業時間数が削減され、周辺教科と呼ばれ、学力と図工・美術は、切り離れてしまったように危惧している。平成29年から同30年にかけて図工・美術の学習指導要領が改訂された。その内容をみると、具体的に図工・美術を教科として重視するというより、学校教育全体の中で重視するものである。20年前学習指導要領にかかわった一人として、「美術の学力」について改めて研究を深めまとめ直すことで、美術の必要性を再構築したいと考えている。

2 「つくること」が「美術の学力」の入り口である。

図工・美術教育にかかわる者は、ものづくり、作品づくりとともに、組織づくり、仕組みづくりなど「つくること」に取り組み、自らの活動を紡いでいる。「つくること」には、目的や必然があり、企画・計画を立て多くの過程を踏んで完成に至る。この経験・体験を通して「美術の学力」を児童・生徒・学生が身に付けるよう、心掛けることが大切である。

さて、筆者は東京藝術大学（以下、「藝大」と略す）と跡見学園女子大学（以下、「跡見」と略す）で指導して15年が過ぎようとしている。この間、都留文科大学⁽¹⁾で2年、東京工芸大学⁽²⁾で1年の兼任講師の経験がある。様々な立場から美術にかかわり、制作を続けている。筆者の信条は、「つくること」を取り入れた授業を工夫することで、「図工・美術の学力」の重視・発展に繋げることである。

一方、「アトミ・アニメ・アート研究会」を学生と共につくり、地域の活性化や児童館教育、障害者アート等に取り組んできた。

このような活動から、「美術の学力」を「美術力」と名付けその重要性を検証し、

本稿の中で明確にしていく。

3 学校教育における「美術力」

平成29(2017)年告示(高校は同30年告示)の改訂学習指導要領を前後して、「思考力・判断力・表現力」、そして「読解力」「活用」などが、学力のキーワードになった。

これは、PISA型学力で高い評価を受けた「フィンランドの教育」に大きな影響を受けている。中でも「PISA型読解力」なる言葉ができ、国語教育で話題となった。フィンランドの読解教育は、①復唱：相手の言うことや文章などを正確に把握する。②推論：物事の原因を「なぜ？」と考えさせ、結論を推論する。③評価：相手の行動や言動を評価し、自分の意見を述べる。④適用：テキストの内容を現実の場面に適用して考える。の4つの段階から、論理的な思考力や表現力を育むものである。(引用：『4つの基本が学べるフィンランド読解教科書』2008.9.5 著作：ハンネレ・フォヴィ／メルビイ・バレ／マルック・トッリネン、イラスト：クリスティーナ・ロウヒ、約・編：北川達夫&フィンランド・メソッド普及会、発行：経済界)

ここで筆者が着目するのは、○使われる教科書が絵本のようなこと。○双方型のコミュニケーション能力を育むこと。○プロセス重視の教育を大切にすること、などである。

このような教育は、図工や美術との共通点が多い。また、「言語活動」を「描く活動・つくる活動、鑑賞活動」に置き換えれば、PISA型読解力の上記②推論、③評価が目指すものと類似している。

(1) 学校教育の課題

①小学校の教育

小学校の図工教育は「造形教育」とも呼ばれる。造形あそびに代表され、造形しながら知識や技能を獲得し、「思考力・判断力・表現力」へ繋げていく。

また、小学校の特徴は、全科の教員が図工を指導する点である。全国の小学校教員は、398,223名(出典：平成23年8月公表、総務省学校基本調査)いるが、図工専科の教員は約1,800名である(出典：東京都図画工作研究会⁽³⁾HP)。大学で専門的な美術を学んだ教員が指導しているのは0.5%にも満たない。一方、中学校や高等学校では、専門に美術を学んできた教員が指導する。どちらが良いか悪いかを問うのではない。小学校図工から中学校美術への連携を考え、美術力を一層はぐくむためには、このような現状を改善していくことも方策だと考えるからである。

②中学校、高等学校の教育

美術力を考える時、中学校と高等学校での課題は「美術」という名称である。「図工」から「美術」に変わったのである。鍛金作家である故伊藤廣利先生はよ

く「工作は、工夫して作るもの。工芸は、工作に技芸（技能）を加えつくるもの。しかし、美術は「美」という術で人をだまして表すもの」と筆者に問い掛けてきた。美術は、表現重視で技能を軽視していると唆しているのである。

このことは、各学校に一人しかいない美術教師の指導法とかわってくる。教員によって「学力観や評価」が違うことと、週1時間の授業を経営しきれないことを暗示している。「小学校の図工は好きだったが、中学校の美術は嫌い」という生徒が多い（引用・参考：ベネッセ「第6回学習指導基本調査2016」、好きな教科「図工」2位、「美術」6位）。実際、授業がデッサンばかりだったり、学期毎、同じ課題を続けたりする教員が多いのが現状である。高等学校でも非常勤講師の教員が増え、余裕のない授業経営が行われている実情が聞こえてくる。

(2) 「感性」という「学力」

美術は「感性」を高め、感じる心をはぐくむというのが、筆者が教員になった頃の図工・美術教育のキーワードであった。ところが、「感性」という言葉を、具体的な美術の学力として明示できなかった点が、学校教育における「美術」の弱さに繋がったと反省している。小学校図工の目標に「感性を働かせながら」という文言が平20年の学習指導要領から追加された。また、美術・音楽などを通じて情操を豊かにし、人間性の向上を図る教育を「美育」と呼ぶ。図工・美術は「美育」であり、感性をこの美育を通して高める教科であることから「感性」を美術力の重要な要素だと考える。

(3) 非言語表現

言語表現に対し非言語表現の重要性について、筆者は、2005（平成17）年11月に発行した「表現力の育成と教材開発—非言語表現の原理と教育的意義—（日本教材学会）」にまとめた。これは、3年間、同学会教材開発部（計7名：美術1名、音楽5名、リトミック⁽³⁾1名）で研究した成果をまとめたものである。同研究の主査、西澤昭男氏は「(略)…一方、言語ではどうしても表現できない、感情、観念、感覚あるいは思想など、いわゆる『筆舌に尽くし難い』心の在りようを表現する場合、われわれは、音楽、美術、舞踊、演劇といった形式において、さまざまな表現活動も同時に行っている。…(中略)、言語中心の学習体系のなかにあって、ともすると軽視されがちな非言語世界を提示し、経験させ、非言語による表現力の育成を図ることは、教育に課せられた重要な使命の一つと考える。(後略)」と同研究会誌で論述している。非言語表現もまた、知的活動やコミュニケーション、感性・情緒の基盤である。

(4) 「美術力」を明確するためのヒント

①特別支援学校の教育から「美術力」を考える。

特別支援学校において「美術」の授業を通して発達障害や軽度の知的障害の生

徒の美術的な「資質や能力」を見付け出し伸ばすという事業に、藝大の大学院生や助手とともにかかわった。この成果について、藝大美術教育研究室の教育研究助手：長嶋聡子氏が次のようにまとめている。

○「できない」を克服し、「できる」ことすることで「学び」にできる。

○生徒が、美術のつくる活動を通して「楽しみながらつくる」ことを理解できる。

○「自己」「自我」の形成に、一から何かをつくり出すことで「自信」を持てる。など、美術力を明確にするヒントがあった。

②跡見の学生と参加して

本事業に、跡見の学生も参加した。その内の一人は、現在、特別支援学校で美術の教員になっている。彼女に続くように跡見の学生が数名、特別支援教育の図工・美術にかかわっている。「つくる活動」を通して、生徒の変容を感じ取り、生徒のつくる喜びを見付け出している。

障害のある子どもの美術教育については、多くの研究や実践報告があるが、美術の効果は様々な形で表れ、紹介されている。図工・美術の授業を通して、隠れていた才能や能力を引き出せることは、「障害者アート」が社会的に一般化されたことでも明確である。



田園調布特別支援学校での
共同制作作品

4 筆者の実践

創作活動、論文等の執筆は、自らのノルマとして続けてきた。2011（平成23）年から、銀座に古くからある月光荘画材店の協力を受け、同画材店が経営するギャラリーで個展と跡見の卒業生らとのグループ展を4年間続けて開くことができた。この個展と並行して、「アトミ・アート展」を跡見花蔭記念資料館等においても開催している。

(1) ものづくりの方向…「机や壁に作品を」

中学校教員になった当初、返却した作品がごみ箱に捨てられたり、ロッカーに放置されたりしたのを見るにつけ、悲しい思いをした。

跡見の学生は、数多く美術・工芸実習を受講してくれる。教員免許取得のためでなく「ものをつくる」ことが好きなのである。陶芸家、漆芸作家やジュエリーデザイナーなどとして活躍している卒業生もいる。

自らがつくることを実践し「美術」好きの学生を一人でも多く育てる工夫を日々考えている。

(2) 論文を書く。

制作する者が論文を書くことは、美術の社会へのPRと参画に繋がる。教育行政・文化行政に携わっていた頃、いつかまた「絵を描いて生活したい」と1年に数枚の日本画を描き続けた。

この逆を今は実践している。制作と書くことを並行している姿を見せることは、描く活動・つくる活動以外の「美術力」を社会に示すことになる。

5 「美術力」の定義

美術の学力の「美術力」に至る過程を述べてきたが、「美術力」とは何かを別な視点から明らかにしていく。数年前、藝大の集中講義の中で155名の藝大の美術学部の学生に「美術の学力」とは何か、記述してもらった。

(1) 藝大生にみる「美術力」

「美術の学力」に対しての藝大生の捉え方から「美術力」をまとめてみる。155名から216の学力を得た（複数記述あり）。高等学校、大学で得る美術の学力についての結果は、次のようなものである。

順位	美術の学力	数
1	様々な美術や美術史に関する知識	26
2	表現力	19
3	技術、技能	15
4	感性、感じる力	13
5	観察力	10
6	つくり出す力	9
	発想力	9
8	創造力	7
	デッサン力	7
10	(総合的な) 学力	6
	探究力	6



第4回アトミ・アート展ポスター
(筆者作品)

12	伝える力	5
	判断力	5

2012.8.24/31「教職課程の研究」受講者155名の調査より

予想以上に多種多様な「学力」を考えてくれた。「美術力」は、学生一人一人によって違った力である。明確なのは、「見に付く力」は何かを回答してくれたことである。

藝大生の美術力を、学生が授業で描いた千社札で紹介する。



「千社札をデザインする」道徳教育の研究2012、学生作品

(2) 跡見の学生にみる美術力

高等学校で「美術」を学んでこなかった学生が多くいる跡見においても「美術力」が多様な形で見えてくる。「つくること」や「描くこと」といった力より、「編集すること」「表現を補助するツール」として現れる。筆者は、教職課程を担当し指導しているが、この2点を次のように活用している。

①プレゼンテーションボード制作

グループ研究の成果をプレゼンテーション及びボードにまとめる。模造紙を使いペンで書く手法はよくあるが、それに加え、色紙、テンプレート、スタンプ、シール、モールなど小学校の図工で使うような材料を準備する。発表後に自己評価・相互評価を行う。「ボードが分かり易い」「上手く構成されている」など、見せたり伝えたりする工夫、編集の工夫は「美術力」の効果である。

②「製本」技術（技能）を授業に生かす

跡見では、簡単な製本を授業の中に取り入れ「技能」の理解や講義のまとめに活用している。美術的な工夫や技能は、社会で役立つ力である。

6 「美術力」をはぐくむ

(1) 定義

美術力とは、言語活動だけでは習得できない知識、繰り返して体験することで身に付く技能を基に、美術だけでなく社会で活動するために役立つ表現や鑑賞の力である。また、編集・構成といった生活の中で必要な力である。

(2) 「美術力」の内容

学校教育においては、以上の定義に基づき、「図工」「美術」の時間はもちろんのこと、各教科、領域の中で、それぞれの学習と関連を図りながら、計画的・発展的に補充・深化・統合し、育成する力である。「美術力」を学校教育に取り入れる目的は、日常的な学習や生活体験が著しく多様化し、国際化が急激に進展する今日、生徒一人一人が身に付ける能力として必要だからである。国際社会で共通に理解できる絵画や彫刻及び工芸などの美術・工芸作品、美術の歴史などから、人間が様々な世界とのかかわり方を深める力であり、自己を確立する力でもある。

(3) 「美術力」を構成する要素

【知識】

- ①美術の知識とは、世界及び日本の美術の変遷を理解するだけでなく、表現やコミュニケーションに生かすための獲得するもの。
- ②伝統や文化の中に息づく「美術」についての知識・理解を図るもの。

【感性】

- 美術の感性とは、言語だけでは得られない、感情、観念、感覚あるいは思想などを読み取るとともに、活用するための土台のこと。

【技能】

- ①技術や道具の使い方や生かし方を、繰り返し体験することを通して身に付け、描く活動やつくる活動の中で正しく選択できるもの。
- ②「伝承されてきた技術・技能」「現在忘れられている技術・技能」「新たな工夫によって獲得できる技術・技能」を理解し、豊かな美術文化を創造する力となるもの。

【「描く活動」「つくる活動」】

- ①「描く活動」「つくる活動」は、美術の表現の基礎・基本であり、児童・生徒一人一人が表現する時や編集する時に、効果的な生かし方を工夫できる活動のこと。



- ②「知識」や「技能」の獲得と関連付けたり、「観ること」と関連付けたりして、自らの「美術力」を高めるもの。
- ③「想像力」や「発想・構想の能力」を深める活動だと心掛けること。

【みること】

- 「みること」は、美術作品を鑑賞するだけでなく、「対象を見る」「人や社会とのかかわりの中から見る」など、多様な意味が込められていることに気付くこと。

(2) 社会教育・生涯学習で生かす。

社会教育は、学校教育の延長であり、それぞれの「美術力」の要素を、自らの興味・関心によって高めることが大切である。また、次なる世代に引き継ぐことを常に考え、美術環境の整備や文化社会の構築に寄与する態度が重要である。そのためには次の点を工夫することが大切である。

①美術館や図書館との連携

文化芸術基本法において明記されたように、美術館や図書館などの連携することで「美術力」は一層高まるものである。しかし、日本においては、学校と美術館や図書館の連携を図るような人間育成が不十分なところもある。人と人、人と組織を結びつけるような人間の育成を図ること。

②地域から「美術力」の発信

「美術力」は、様々な地域、国から発信すべきものであり、それらが美術文化として根付いていく。これらの原理・原則を理解して行動し、発信すること。以上を、「美術力」の要素としまとめた。

7 おわりに

現在、美術はピンチだと筆者は考えている。学校教育における授業時数減もその一つだが、美術系大学に学生が集まらないこと、美術科の専任教員が減少していることなどが、この実情を現している。このような時代だからこそ、「美術力」を生きる力として学校教育をはじめ教育の中で活かしたい。

インターネットの発達で、多様な価値観の美術が存在してきた。美術の変化は予想以上に激しいものであり、それを受け入れる時代が到来した。このような時代に必要なのは、新しい美術や文化をつくるとともに認める人間を育てることである。跡見は、学部・学科が15年前とは変わったが、美術をつなぐ・つむぐ役割を永年にわたって担ってきた。学祖である跡見花蹊は、「美術」を学びの基盤とするとともに、自らの生き方・実践の中で美術の力を示してきた。この志を引き継ぐ者として、美術界のピンチをチャンスに変え、文化芸術社会の活性化を図るため、様々な場で美術力をはぐくむ工夫を進めていく⁽⁵⁾。



「平成に生まれて」2018.12 筆者作

註

- (1) 1953年に創立した教員養成の大学。山梨県都留市にある。筆者は「図画工作教材研究」を2年間担当した。1講座の学生は100名前後で、年間300名以上を指導した。
- (2) 同大では、「美術史」を担当した。芸術学部・写真学科、映像学科、デザイン学科、アニメーション学科、マンガ学科の学生を指導。200名の講座を2コマ指導した。
- (3) 「都図研（とずけん）」東京都各区市町村の小学校の図画工作教育に携わる教員の研究団体であるが、全国的な活動もしている。都図研 @tozuken.com
- (4) 音楽を勉強するのではなく、体全体を使って、体の中に音感・リズム感を育てていく音楽教育のこと。
- (5) 本論文は、2013年に執筆途中のものを加筆修正してまとめたものである。